

羅針盤



社会科部 情報活用委員会

「社会科の担うもの～額田の地から～」

社会科部長 平岩 和博

平成 18 年 1 月 1 日、額田郡額田町は、岡崎市に合併しました。合併前からの額田の小学校では、特色ある取り組みをし、子供たちだけでなく、地域の人たちも、自分たちの学校＝「おらが学校」として、愛着と誇りをもってきました。豊富小学校は、授業の中で子供たちの意見を子どもたちが板書していく自主学習に取り組みました。夏山小学校では、里山や川を大切にする環境保全に力を注ぎ、鳥川小学校では、ホタルの飼育に取り組みできました。また、宮崎小学校では、継続的な愛鳥活動を、大雨河小学校では、地域の人を取り込んだ大胆な総合学習を、千万町小学校では、45 年にわたる全校児童による音楽活動に取り組み、多くの方々に評価されました。形埜小学校では、FBC に長年取り組むとともに、川の水質調査やササユリの保護活動を、下山小学校では、ササユリの保護活動や栽培、聾学校との交流を、そして、私の勤務する額田中学校では、全校合唱や林業学習などを、各校が特色ある取り組みをしてきました。

岡崎市の面積の 4 割を占める額田地区(＝額田中学校区)の人口は、今から 30 年ほど前の額田町時代には、1 万人に手が届くかというほどでした。しかし、現在は、8,615 名(平成 25 年 9 月 1 日現在)。額田中学校の生徒数は、多いときは 470 名余りで、かつては、学区の小学校は 8 校ありました。過疎化の波は、少子高齢化に拍車をかけ、現在本校の生徒数は全盛期の半数以下の 220 名。小学校は 3 校が平成 22 年 3 月末に 140 年ほどの歴史に幕を下ろし、現在は 5 校で、複式学級も生まれています。そんな中、新東名高速道路の工事が進み、額田の地にインターチェンジが作られ、住宅や工場が建ったり、人口が増えたりして発展していきますようですが、どれほどの変化をもたらすかは未知数です。

ともあれ、これまでの各校の取り組みのように、学校や郷土を愛する心の育成こそが、地域の活性化に大きな力となり、過疎化にブレーキをかけることにつながるはず。学校に愛着や誇りがもてるようになるには、学校での濃密で特色ある活動によって自己の成長を自覚できることが求められます。同様に、郷土に愛着や誇りがもてるようになるには、自分自身が、郷土の自然や人々、歴史や文化の中で育まれてきていることを自覚できることが重要です。このように考えれば、社会科の授業で郷土や郷土の偉人について学ぶことは、母校への愛着や郷土愛の根っこの部分の育成(＝岡崎の心の醸成)を担う重要な役割を果たしていると言えます。



おかざき学習実践報告

【大樹寺小学校】<6年生>「徳川家康」の実践

大樹寺小学校は、松平、徳川家にゆかりのある大樹寺が正門前にあり、徳川家康のことを学習するには最高の環境です。学校内もかつての大樹寺領内であったため、総門など、数々の史跡が残されています。子供たちは、低学年のころから家康に親しみ、豊富な資料を活用して学習を深めています。家康公遺訓は、毎月自立の日に全校で唱和し、生活の一部になっています。

6年生の実践では、地域の方や観光で大樹寺を訪れた方にガイド活動を行いました。郷土読本「おかざき」や様々な資料を使って家康や大樹寺について調べると共に、何度も大樹寺を訪れて現地調査を行いました。

ガイドでは、大樹寺にある徳川将軍の等身大の位牌や家康の祖父松平清康が建てた多宝塔など、実物を前に分かりやすく説明をしました。人物に関するエピソードやクイズも加え、聞いている人に興味をもってもらえる工夫もしました。児童の感想には、「調べたことをたくさんの人に伝えられて満足できました」「家康と大樹寺との関係が深いことを改めて知りました」とありました。自分たちで家康に関することを学ぶだけでなく、人に伝えることで、さらに家康のことを深く考えることができました。(杉田 浩史 教諭)



【総門前でガイドをする児童】

【夏山小学校】<5・6年生>「徳川家康」の実践

夏山学区には、仙丸の墓があります。仙丸は、戦国時代、武田方に送られた奥平氏の人質でしたが、一族が徳川方になったため犠牲となります。授業の最初に、そんな夏山学区にゆかりのある仙丸という人物を取り上げ、生徒の家康学習に対する関心を高めました。すると、子供たちは、どうして奥平氏は武田方ではなく、徳川方につかなければならなかったのかと疑問に思い始めました。

その疑問に対して「徳川家康が強いからだと思います」「賢いからだと思います」という意見が出てきました。そこで、「徳川家康は本当に強かったのだろうか」という発問をしました。子供たちは、郷土読本「おかざき」や図書室の資料を使いながら、徳川家康が強いかどうか根拠となるものを探し始めました。

一人調べをしたところで、調べたことを基に話し合いをしました。その中で「家康は、幼少期に人質になって、つらい過去があるから、天下をとることができた」という意見が出てきました。家康の過去に視点が向いてきたところで、岡崎城へと向かい、自分の足で家康館に入り、情報収集にとりかかりました。

家康館では、まず関ヶ原の戦いに注目する子が多くいました。そこで、子どもたちは足を止め、どうして戦いに参加せずに見ている人たちがいるのだろうと不思議に思い始めました。そして、戦いの終わりの方で徳川氏についてを知り、徳川家康一人ではなく、家臣が重要な役割を果たしていることに気づきました。家康館に行ったことが、家臣の大切さに気づき、よい家臣にめぐまれた家康の人柄や過去へと授業が流れていくきっかけとなりました。

(鳥居 優貴 教諭)



【家康館で学ぶ子どもたち】

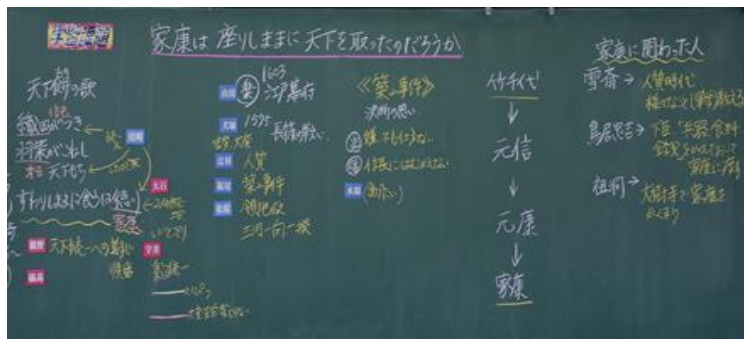
【竜南中学校】<2年生>「徳川家康」の実践

今回の実践は、歴史の授業と連携し、徳川家康が江戸幕府を開く直前で行い、岡崎にゆかりのある偉人「徳川家康」について学習意欲を高めました。

導入では、「天下餅の歌」を提示しました。「天下餅の歌」を聞いた生徒は、「本当に、座っているままで、楽に天下統一を果たしたのか」という疑問が出されました。そこで、家康の天下統一までの歩みを「岡崎」を使って調べました。江戸幕府を開くまでの道のりの年表から、「家康は楽をして天下を取っているのかな」と問いかけたところ、そのようにはあまり感じず、逆に、「広忠の暗殺」「人質生活」「三方ヶ原の戦い」「築山事件」などから苦労を重ねる家康の姿が浮かび上がりました。

家康の苦労にさらに迫るため、「築山事件」を取り上げて、どんな思いで「長男・信康と妻の築山殿を殺害したのか」と話し合いました。「この時代は、上からの命令は従わなければならなかったんだ」「苦しい決断だったと思う」などと、当時の時代背景を考えながら家康の思いに迫ることができました。

「家康は、決して楽して天下を取ったわけではないと思った。自分の大切な家族を失ったり、人質として長い間苦しんだりとたくさんの苦しみを味わい、こつこつと努力をして天下統一を成し遂げたのだと思った」と、授業の最後に書いた生徒の授業日記から、今回の学習を通して、「家康」の歴史の教科書には書かれていない苦労の部分に、生徒たちが触れたことを実感しました。(佐々木 幸美 教諭)



【授業時の板書】

【翔南中学校】<2年生>「徳川家康」の実践

「岡崎の英雄といえど…」江戸時代の学習に入ったばかりの生徒に尋ねると、すぐに徳川家康を挙げました。生徒たちは、家康が約260年も続く時代を作り上げた偉人であることを感じていました。このような生徒に、「織田がつき、羽柴がこねし天下餅、座りしままに喰うは徳川」の狂歌を示しました。そして、「家康は座りしままに天下を取ったのか」と尋ねると、9割の生徒がこれを否定し、具体的には説明できないものの、苦労して天下を取ったと考えていました。そこで、本当に苦労があったのかを、副読本「岡崎」や図書室を使って調べました。生徒が、年表や伝記を使い家康の生涯についての調べを進めていくと、一部の生徒が「築山事件」と出会いました。この史実を学級全体に伝え、家康の決断に疑問をもつ生徒が増加していきました。

「妻や子供を殺してまで天下を取りたかったのか」という考えが出され、すかさず「そこまでして天下を取りたかったのはなぜだろう」と全体に問い返しました。グループで話し合ったあと、学級全体で話し合い、生徒からは「家康が目指していたのは平和な社会で、戦国時代を終わらせるために苦渋の決断をした」という意見が出されました。平和な社会を実現したという家康の業績を改めて実感し、偉人への思いを深めた単元となりました。

(中根 良輔 教諭)



【自分の立場を明確にする生徒】